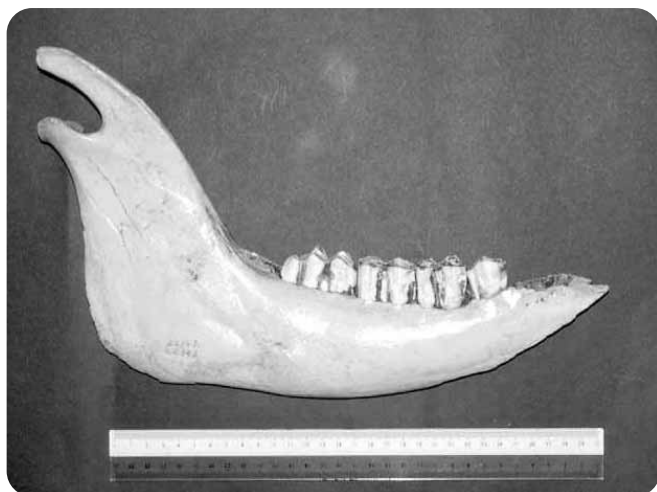


モノが語る牛と人間の文化



② 岩手の牛たち

奥州市牛の博物館 黒澤弥悦



(写真1) ハナイズミモリウシの下顎骨化石
(財・斎藤報恩会自然史博物館蔵)

「前沢牛」誕生で岩手県前沢町（現・奥州市）に牛の博物館が建設されたが、一般に地方行政が創る総合博物館や郷土館は地域との歴史的関係が重視される。

牛の博物館建設を指導された、当時茨城大学教授であった正田陽一先生（現・当館名誉館長）は、岩手県の前沢の地に「牛の博物館」が建設される歴史的必然性を牛の博物館機関紙第1号で次のように述べられた。

まず第一に「岩手県は旧石器時代の古代野牛・ハナイズミモリウシの化石骨の発見地であること」。第二に「藩政時代には南部牛と呼ばれる役牛がたくさん飼われていた」。そして第三に「現在、肉質日本一の“前沢牛”の生産地である」点からその必然性を説かれた。他に野牛だけではなく家畜牛の祖先種とされるオーロックス（原牛）の化石骨の出土や、南部牛を基に改良して作られた日本短角種の作出の土地であることにもふれられ、岩手には牛に関する特別な歴史が他の地域に比べ抜きん出ていることを話されていた。

こうした牛に関する歴史を古代から現代にわたって岩手という広い地域の枠の中で捉えて見ると、岩手県の前沢が牛の博物館建設に相応しい地だったともいえるのである。オープンした牛の博物館は、当然それらの岩手の牛についても調査研究し、その成果を展示に

活かしていくことになる。それは、岩手をはじめとする東北地方がむしろ馬産地として知られ、その馬文化の中で埋もれていた牛の新たな歴史的事実の発見につながることもなるだろう。

モノが語る牛と人間の文化についての連載は、先ず岩手の牛たちから紹介してみる。

ハナイズミモリウシと岩手のオーロックスの化石骨

ハナイズミモリウシ (*Leptobison hanaizumiensis*) は、今から2万年程前の第四紀更新世後期の氷河期に生きた野牛である。この野牛の化石骨の発見は、1927年の5月、岩手県南に位置する花泉村（現・一関市）の農家の人が井戸を掘ったときに、おびただしい数の獣骨が出土したことに遡る。その後、度重なる調査において多くの獣骨の中からハナイズミモリウシの化石骨を最初に見つけた当時の花泉村長で、郷土史研究者でもあった佐々木盛輔氏の名前と花泉の地名からその名が付けられた（写真1）。発見地も地名にちなんで花泉遺跡と呼ばれ、古生物学会では広く知られている。遺跡からはナウマンゾウ、オオツノジカ、ナツメジカ、ヘラジカの化石骨も出土し、その上、最も多く出土したハナイズミモリウシの中には実は、原牛 (*Bos primigenius*) の化石骨も含まれていたから驚きである。その原牛を「岩手のオーロックス」と呼んだ元岩手県畜産試験場長の澤口靖雄氏の話は、一時話題を集めたことがあった。家畜牛の祖先種であるオーロックスの名は畜産学を学んだ誰もが知ること、原牛よりその呼び名で呼ばれることが多い。

遺跡から出土した骨の中には、肋骨で作った骨角器というような人為加工の痕があるものもある。この時代には人間が存在し、ハナイズミモリウシや原牛は狩猟の対象になっていたことがわかる。

ハナイズミモリウシは、現在ヨーロッパやアメリカにいる野牛（バイソン）に近い種類で、ユーラシア大陸にいたプリスクス野牛 (*Bison priscus*) の系統ともい

われている。出土の化石骨から復元したその骨格が岩手県立博物館に展示されており、これは野牛の化石としては日本で初めての復元である。それは体高が2メートル近くある大きな野牛であった。野牛は氷河期に北海道と本州が大陸と陸続きになっていたため大陸から北海道を通して本州にやって来たのである。野牛の化石骨は、他に北海道と瀬戸内海でも見つかり、古代、今の日本列島が野牛の生息地だったことを想わせてくれる。

原牛も本州に渡ってきた野牛の一種であり、それは学名が示す通りハナイズミモリウシとは異なる系統である。狩猟や生息地の環境破壊により1627年にポーランドの森で最後の1頭が死亡して絶滅している。幸い、原牛の絵が実在しており、その姿を知ることができる。ヨーロッパ各地には骨格標本も残されており、当館ではオランダ産のその下顎骨化石をハナイズミモリウシ

や世界各地から収集した野牛の化石と比較して展示している（写真2）。

原牛が家畜牛の祖先種ではあるが、わが国で飼われてきた在来和牛は、日本にいた原牛から家畜化されたという証拠はない。家畜牛の起源は、西アジア地域に生息していた原牛が9,000年前頃に馴化され、それが家畜の牛となって、数千年の時を経て文化の伝播と共に日本へやって来た。これが日本の家畜牛の始まりとなったのである。わが国で最も古いとされる家畜牛の証拠を示すのは、東京都港区で見つかった弥生時代中期の伊皿子遺跡の牛骨出土例があるが、家畜牛が本格的に持ち込まれたのは古墳時代以降とされている。岩手のオーロックスは直接わが国の在来牛と関係はないが、いずれにしてもハナイズミモリウシと共に、旧石器人の狩猟の対象とされ、また生息地の環境の変化などが原因で絶滅したと考えられる。



(写真2) ユーラシアおよび北米大陸から産出した野牛の化石。ハナイズミモリウシを想像させる大きな体格をした野牛の骨格(アンテイクアス野牛 *Bison antiquus*)と頭蓋骨(プリスクス野牛 *Bison priscus*)。

南部牛を伝える“ベゴ”

野牛がいた頃から時代は大きく下るが、藩政期における南部藩地方には「南部牛」と呼ばれる在来の牛がとりわけ多く飼われていた。北上高地北部の岩泉・葛巻・久慈地方がそれである。この地方は、険しい山間にあり、当時は内陸部と沿岸部を結ぶ物資の輸送機関として南部牛が使われていた。急峻な山道では馬より牛が威力を発揮したのである。

一般に「塩の道」として知られ、また鉱物の産地でもあった北上高地は、それらの物資を運ぶ南部牛の活躍の舞台であった。そこには「南部牛追唄」で知られる民謡をはじめ牛と人のかかわりの様々な民俗文化が残っている。そのひとつが岩泉町から葛巻町、そして久慈市に至る山間の集落に残る「ベゴ」と呼ばれる赤松の枝を牛の角に見立てて作った原始的な郷土玩具の存在である(写真3)。とりわけ岩泉・葛巻地方の70歳以上の人は、「子供の頃、祖父や父親に作ってもらったベゴを親が牛をひく姿を真似て、引いて楽しむ遊びに夢中だった」という。ところが同地方の沿岸部の同年齢の人たちはその存在をほとんど知らないのである。それは、南部牛の盛んな生産地帯は内陸の山間部であったことを示している。子供の遊び道具のベゴが、そのことを伝えているのである。

南部牛の来歴に関しては、市川健夫氏が1995年の国立歴史民俗博物館研究報告に発表した論文「日本人の家畜飼養と野生動物とのかかわり」から探ることができる。すなわち、南部地方は近世まで日本の先進的馬産地で、中世を通じて東北アジアから種畜を時折導入し、牛馬の改良に努めてきたとされている。これが南

部牛の成立のきっかけになった可能性も考えられるが、詳細は不明である。日本への家畜牛導入が、一般に朝鮮半島や中国大陆から九州や西日本辺りに入ったとされている中で、南部牛の来歴が注目される場所である。いずれにしても西アジア地域で家畜化によって始まった家畜牛の飼養文化は日本へ伝播し、その極東での終着点が岩手であり、そこで南部牛が誕生したのである。では、南部牛とはどのような牛だったのだろうか。それを知る一枚の写真が、岩泉町に残されている(写真4)。それは明治14年(1881)の第2回内国勧業博覧会に釜津田村(現・岩泉町)から出品したときに撮影されたもので、牛の博物館が調査した当時の出品目録の資料(東京国立博物館蔵)には洋種との雑種と記されていた(川田ら、在来家畜研究会報告、1999)。しかし今日の和牛品種と比べ小柄な体格で、後躯の充実がなく、明らかに在来の役牛としての特徴を写真から読み取ることができる。南部牛は明治政府の農商務省が勧めた外国品種による和牛改良熱が高まった、いわゆる雑種万能時代に英国原産のショートホーン種との交配が行われ、それが日本短角種の造成へと進ませ、南部牛を絶滅へと向かわせていったのである。

日本短角種は、岩手県では主に平地の稲作地帯で飼われる黒毛和種と違って北上高地山間部で夏山冬里方式によって飼われている。それは南部牛の時代を想わせる飼養風景で、実に岩手の自然にマッチした、牛の飼養文化の本来の姿でもあるように思える。

牛の博物館が開館して13年目を迎える。これまで馬産地の歴史の中で埋もれていた岩手の牛に関する資料が徐々にではあるが、姿を現し始めている。



(写真3) ベゴを手にとる筆者。牛の博物館が収蔵する民俗資料の中では気に入っているひとつである。ベゴとは方言で牛のことである。それを玩具の呼び方にも使っている点は興味深い。



(写真4) 南部牛の姿を伝える写真。(八重樫謙郎氏蔵 岩手日報社提供)